

2015年
12月3日
木曜日

原田 哲史 教授（文化と社会の経済学、社会思想史）

会ったことのない祖父に 助けられたこと

『網要』を解き明かしていくことができた。

博士論文を完成させてドイツで出版したとき、「序文」の謝辞で「Shigesburo Harada」の名前も記しておいた。会ったことさえない人だが、イメージすることで助けられたからである。帰国後、私の研究はミュラーに焦点を合わせた（『アダム・ミュラー研究』ミネルヴァ書房、二〇〇二年）。ミュラーの思想が保守的・伝統継承的であるがゆえに、かえって現代の世代間倫理の問題にとつて貴重な示唆を与えてくれることを、私のオリジナルとして提起した（『アダム・ミュラーにおける自由論と世代間倫理』、『経済学論究』第67巻第1号、二〇一三年）。

過去の思想には、現代にも通ずる様々な要素が素朴な形で含まれている。一見すれば奇異に感じられるこ

私の生まれる前すでに没していた父方の祖父繁三郎には会ったことがないが、子供の頃父からよく話を聞かされた。京都の友禅染の親方であり、かつ「救世軍」というキリスト教の慈善運動をやっていた、とのことである。幼い頃その話は好きだったが、自分にはとくに関係ないと思っていた。

さて、私は大学（学部）を卒業したのち、研究者をめざして大学院に進んだ。二十代後半、留学先のドイツで博士号の取得を目指した。博士論文は「フィヒテとアダム・ミュラーとヘーゲルにおける職業団体論」というテーマで、18〜19世紀転換期の3人の思想家たちが労働者問題・貧困問題に対処して構想した職業団体論を扱うものであった。私は初め、官僚の主導する新たな職業団体というフィヒテとヘーゲルのそれはイ

メージしやすかったが、中世以来の職業団体や教会の継承を主張する伝統継承的なアダム・ミュラーにはなじめなかった。それまで近代思想とマルクス主義を重視する社会思想史を学んできたため、旧来のギルドの親方が教会とともに市場経済社会での貧困に対処するミュラーの発想は古臭く異質に感じられた。しかし、その解明なしに論文は完成できなかった。

そうしたとき祖父のことが頭によぎった。夢にも出てきた。整った顔立ちで和服姿の友禅染の親方は、搾取者ではなく、丁稚たちに温かく技能やマナーを教え、浮浪者を家に招き入れ、街頭で「社会鍋」を行う慈善活動家であった。ミュラーはこのような人をイメージしていたのではないかと考えたとき、理解する気構えができ、難解な彼の名著『国家学

ともあるが、思想史研究はそれを解明する仕事である。その意味を掘り起こそうと思っても読解困難な叙述にぶち当たり、たじろぐことがある。しかし、それに通ずる誰かをイメージしてみることが理解の手掛かりとなりうる。死んだ人や会ったことのない人であっても、心躍る人物であればそうである。このことは、生きた人間たちの社会生活を把握しようとする社会科学・人文科学の研究にとつて重要なことであろう。

付記——この講話は、2015年7月19日に日本キリスト教団京都葵教会（京都市左京区下鴨）での永眠者追憶の会でのスピーチがもとになっている。戦前の救世軍京都小隊が戦後に教会として再編されたのが同教会であり、その納骨堂には祖父の遺骨が納められている。■